

菊池川大河物語① ～菊池川の恵を享受した人々～

古代から文明は川の近くで発達してきました。菊池川流域でも、早くから文明、文化が育まれてきており、古墳時代の5世紀末ごろに築造された和水町の「江田船山古墳」からは、国宝に指定された「銀象嵌銘大刀(ぎんぞうがんめいたち)」が出土しており、大陸や畿内地方などとも交流していたことが想像されます。また、「チブサン古墳」に代表される装飾古墳は、全国の約18%が菊池川周辺に集中。菊池川流域では、古くから多くの有力な豪族が生まれていたことが伺われます。

7世紀後半には、唐や新羅からの侵攻の恐れから、大和朝廷は大宰府を守るための軍事拠点鞠智城を菊池川を見渡せる台地に築城したと考えられます。

平安時代の末には、後に九州に覇権を広げた菊池氏が現れ、次第に勢力を拡大し、最盛期には菊池市隈府にある本城のまわりに18の支城を配置。南北朝時代には、南朝方の主力として、足利尊氏ら北朝方との激しい戦いを各地で繰り広げています。第15代当主菊池武光の時代には、征西将軍に任命された後醍醐天皇の皇子・懐良親王を菊池に迎え、日本三大合戦の一つである筑後川の戦いを経て九州を平定しました。親王の居城だった「雲上宮」、観月を楽しんだ「月見殿跡」は菊池神社のすぐ近くにあり、今も往時の名残をとどめています。また親王のお手植えのムクノキ「将軍木」も残されており、木の前の能舞台では親王を慰労するために舞われたのが起源とされる松囃子能が現在も菊池神社例祭で上演されています。

天文12年(1542)、大友義鑑が菊池義武を追って、菊池氏約450年の歴史の幕が閉じられた後はこの地は再び群雄割拠の時代を迎えます。菊池氏の重臣だった隈部氏らが台頭。隈部氏は肥後国北部最大の「国衆」にのし上がりました。

隈部氏は豊臣秀吉の時代になると肥後国を拝領した佐々成政の家臣に組み込まれましたが、検地を迫る成政に逆らい、田中城(和水町)を居城とする和仁氏らとともに挙兵。肥後国衆一揆を起こしました。一時は成政の隈本城を落城寸前まで追い込みましたが、秀吉軍の圧倒的な軍勢の前に田中城での戦いを最後に一揆は終結、隈部氏も滅びました。

このストーリーは、菊池川流域の豊かさを背景に古代から安土桃山時代までの、この地での勢力の移り変わりとその痕跡を辿るとともに、菊池氏約450年の歴史と、一族が菊池市や周辺の地域にもたらした影響や文化、今に息づく菊池氏の面影などを辿る歴史物語です。